

えんぎ めいしん うらな
縁起・迷信・占い

「お茶の中に茶柱が立っていると、いいことがある。」——年配の人だけでなく、若い人たちの話の中にも、こういう縁起や迷信はよく出てくるが、その由来や理由ははっきりしないものが多い。多くは、単に気分的なものから始まったのかもしれない。でも特に神経質な人でなくても、例えば、霊柩車を見ると不吉そうに親指を隠したり、夜中に爪を切らないようにしたりしている人は案外いる。「招き猫」を飾っている店も多いし、選挙の当選風景には、必ず「ダルマ」に目を描き入れる候補者の姿がある。

このような言い伝えが受け継がれているのは、なぜだろうか。心理学的には、いろいろな説明がある。例えば、人間には「死」などの未知のものへの不安や心理的緊張を解消しようとする働きがあるからだ、と言う人がいる。また、多くの人が信じているものを自分も信じていれば安心だと思う気持ちのせいだ、と言う人もいる。

このような「不安解消」や「同調性の心理」の効果は、「占い」にもある。最近、一口に占いといっても、いろいろなものがある。占い師が一番多いのは銀座。この街を訪れる人は年齢層が比較的高いので、人相、手相などのオーソドックスな占いが多い。また新宿には「新宿の母」と呼ばれる有名な占い師がいて、その前にはいつも若い女性がたくさん並んでいる。一方、若い人が多い原宿や渋谷には「占いの館」などと呼ばれる店が、ビルの中などにたくさんある。かつては、子どもたちは、自分の悩みを親や先生など身近な人に相談したものだ。だが、最近は、こういう所へ通って自分の話を聞いてもらう中学生や高校生もいるのだそう。彼らにとって、占いとは、実に身近な存在であると言える。

科学の時代になったにもかかわらず、このような縁起・迷信・占いなどは、今も日本人の日常生活の中に生きているし、これからも残っていくだろう。自分の不安を自分で解消できない人や将来が心配な人は、だれかに「大丈夫ですよ。がんばって。」と言ってもらいたいと思うものだ。どんなに技術が進歩しても、この点は変わらないからである。